
MY SWEET DARLIN'(補完編) 幼馴染は目撃者

来生尚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MY SWEET DARLIN・(補完編) 幼馴染は目撃者

【コード】

N5980T

【作者名】

来生尚

【あらすじ】

MY SWEET DARLIN・「道標」後補完

サーシャの幼馴染ルア目線の話。

約10年ぶりに生まれ故郷に戻ったルアが見てしまった衝撃の事実とは。

「何しに帰ってきたの」

冷淡な瞳を向ける幼馴染その1カラに、笑顔を向ける。

「里帰りに決まってるじゃないか」

はーっと大きな溜息を吐いたカラを押しつけ、雑踏の向こうに見える実家を目指す。

何年ぶりだ。

まさかここに戻る時に子供を抱いている事になるうとは。いやいや、人生何があるのかわからんものだね。

「ちよつと待ちなさいよ」

「なんだよ、キーキー煩いな。折角寝てんのに起きたらどうすんだよ」

腕の中で眠る末っ子を気遣って諫めると、あからさまに舌打ちなんかする。

あーやだやだ。乱暴な女って。

「他の子はどうしたのよ」

「嫁が先に実家に連れて行っただけど？」

「あつそ」

興味ありませんって顔するなら聞くなよ。顔を見るなり絡んできて、本当にコイツは昔っから姉御肌行き過ぎって感じで小うるさいんだよな。

「ササは？」

「あんた隣の家なんだから見てくれればわかるでしょ。大体人の顔見るなりササはって。超失礼っ」

素っ気ねえな、つたく。

「わかったわかった。後でシュウの店行くから、その時にでもな」
ひらひらっと手を振って背を向ける。

子供抱いて険悪な会話を繰り返す気も無いしな。

背後から巨大すぎる溜息が聞こえたような気がするのは、気のせいだろう。

村を出た時から考えられないほどの賑わいを見せた商店街の中を歩き、目的地の実家へと辿り着く。

隣の幼馴染2の店は盛況のようだ。

さしあたっては腕の中の子を横にするのが先決だろう。

横目でパン屋を見送って、今や懐かしいという形容が似合う実家の敷居を跨いだ。

夜が更けて、村にある一軒きりの酒場に顔を出すと、カウンターで管を巻いている幼馴染1の姿を発見する。

怖えー。あれと話すの嫌だなあ。何であんなに機嫌悪いんだろうな。女ってわかんねー。

「よお」
当たり前障りの無い感じで声を掛けて、しょうがないから隣に座る。誘ったの俺だし。

カウンターの中にいる店主のシュウが珍しいものを見たような顔をする。

「お前、帰ってきたのか？」

「上官がまとまった休みをくれたから、孫の顔を見せにね」

「そうかそうか。で、今お前何人子供いるんだっけ」

「3人。男男女女。今また妊娠中」

プッとシュウが噴き出す。

「随分子沢山だな」

「そうか？ 子供は可愛いから何人いてもいいよ」

「1000人に増えたらぜひ教えてくれ」

「それは無理」

何がおかしいのかケタケタ笑って、シュウはジョッキを置いてカウンターの他の席へと足を向ける。

ん？ どこかで見たことあるような気がするけど。他人の空似だ

な、きつと。

「そんなに子供いて、大変じゃないの？」

左隣に座る幼馴染が呆れたような顔をしている。

「お前のほうはどうなんだよ」

「嫌味ね。子供がいたらこんなに勝手気ままには飲みに出られないでしょ」

「そうだよな」

暑さで泡があつという間に消えてしまふジョッキに口をつけ、勢いよく飲み込む。シユワシユワと喉を通る感じが心地よい。

村の名産品のワインもいいけれど、暑い日はやっぱりこっちだよな。

「旦那放って飲み歩いてて、文句言われねえのか」

「言われるわけじゃないじゃない、婿養子に貰ったんだから。私に頭、上がるわけないでしょ」

うーん、それ以前の問題な気がするけどな。めんどくせえから黙っておこう。

よくこれと結婚する気になったもんだ。きつと、そいつとは一晩中でも酒が飲めるに違いない。

「こっちにいる間に挨拶に行こうかな」

「えー。やめてよ。来なくていいって」

思いつきり嫌そうに眉をひそめるといふのは、会わせたくない何かがあるのか。

「お前の旦那を見に行くんじゃないやなくて、おじちゃんとおばちゃんに挨拶に行くの。別にいいだろ」

ダメって言われても行くし。

めったに村になんて帰れないんだから、こんな機会に色々見ておきたいしね。

色々変わったんだろうな、村中が変わったように。

「それにしてもアンタ、よくまあ恥ずかしげもなくあたしの前に顔出せたわね」

「は？」

「散々色々愚痴を零していたくせに、戻ってきたと思ったら3人の子持ちつて。何だかなーって思われても仕方ないんじゃない？」

また説教モードかよ。めんどくせ。

「その件なら悪かったつて。俺もお前くらいしか話せる奴がいなかったんだよ。悪かったな」

もう一人の幼馴染との事を言っているのだろうと思って一応謝ると、ふんつとそっぽを向かれる。

「ホントよ。心配してあげたりしてバカだったわ、あたしが」

勢いよくワインを飲み干し、カチンとグラスを指で弾くカラを横目で見つつ、ジョッキの酒を煽る。

もう何年も前の事をグチグチと。

「若気の至りつてことで。この話はおしまいにしよう」

言いながら空のワイングラスにワインを注ぐと、ありがとと小さなお礼が返ってくる。

「一個だけ聞いてもいい？」

「何だよ」

「結構さ、長い間悶々としてたわけじゃない。それをどこで切り替えたの？」

悶々つて。ひでえ言い草だな。

そりゃまあ、数年間はグチグチしてたから言われるのもしょうがないけどさ。

「大祭を見たからかな」

「大祭？ どこで？」

「水竜の神殿で。話すと結構長いよ」

「いいよ。どうせ夜は長いんだから、とことん聞くから」

言つと、カラはおつまみやらお酒やらを山のようにシユウに頼んで、その全てが並ぶと「どうぞ」と振ってくる。

暗に話す気は無いって誤魔化したつもりだったんだけど、全然通じてないな。

さて、どこから話すとするか。

「俺は祭宮様付きの近衛兵なんだけど」

「知ってる。そんなの王子様が村に来た時に聞いた」

王子様って。

確かに王子様だけど、あの人は。そんなキンキラっぽい俗称は似合わない気がするけど、まあいいか。

「でも下っ端じゃん。あんまり護衛とかには連れて行って貰えないんだ。だから水竜の神殿に行く時は下っ端の中で交替で行くんだけどさ」

「ふーん。それで」

鶏肉を齧りながら聞くな。結構いい話だぞ、これからする話は。

「何回目かの水竜の神殿への護衛の時が、たまたま大祭の時だったんだけどさ。やっぱり違うね、水竜の神殿」

「何が」

「いや。規模とかさ。半端なく凄いな。神々しいって感じ？」

「ふーん」

興味ないのかよ。もうちょっと身を入れて聞けよ。失礼な奴。

「でさ、壇上にいる巫女を見て、ああ、こりゃ俺ダメだわって思ったわけだよ」

白い目を向けんかったの。

「俺なんかとは住む世界も違うし、手の届かない存在なんだなって思い知ったわけだよ。それで諦めたってわけ」

「綺麗だった？」

「ああ。すんごくな。宝石とか来ている衣装とかつてもそうかもしれないけれど、何とも言えない雰囲気か漂ってた。そこに水竜がいるんだって思わせる様な、な」

「そっか。近いんだから一度くらい見に行ってみれば良かったかもしれないわ」

溜息交じりに呟いて、カラがワインを一口飲む。

「それが今やパン焼いてるんだから、人ってわからないものよね」

つられて思わず笑みが零れる。

確かにそうだ。昏間に隣を覗いたけれど、そこにいるのは昔と
なら変わらないササだった。

多分、元巫女を見に来る人たちは拍子抜けしたんじゃないのかな。

「ああ。そうだ。ササっていつ戻ってきたの。俺さ、今の国王陛下
の即位式の際に王都でササ見かけたんだよね。その時には巫女辞め
てたんだろ」

ん？ とカラが首を傾げる。

「超イケメンと一緒に歩いててさ。俺びっくりよ。しかも王都だし。
それにさ、超ラブラブだったんだけど、あの時の彼氏はどうしたん
だろ」

「白昼夢でも見たんじゃないの」

何で俺が白い目で見られるわけ。意味わかんねえ。

「いや、本当に会ったんだって」

「それ他人じゃないの？ だってササはこの夏に帰ってきたばっか
りよ」

「え？」

「え。じゃないわよ。あんたが帰ってくる一月半くらい前に帰って
きたの。一応極秘だけど、水竜の巫女だけじゃなくて紅竜の巫女で
もあったのよ」

耳元で囁くカラの言葉に、耳を疑う。

なんだって？ んじゃあの時にあったササは？

いや。でも確実に間違いないササだったぞ。声も姿も。ああ、姿
はちょっと変わって可愛らしくなってたけどな。

軽く頭の中が混乱する。

こればかりは本人に聞いてみないとわからないな。

「か……っ！！ 何してんの？」

噂の本人の超でかい声が酒場の中に響き渡る。どうやら入り口付
近の席で誰かに指を指している。

「あんたが呼んだの？」

隣のカラが問いかけてくる。ササのことだよな。

「昼間に隣に寄った時に、カラと酒飲むけど来るかって聞いたから」
「あっそ」

くるくる回る椅子を180度向きを変え、カラが酒場の入り口のほうに目を向ける。

「で、あれ誰？」

「知らないわ」

問いかけにカラは首を横に振る。

全然気付かなかったけれど、カウンターでシュウと話していた片目の客が入り口付近の席に席を移していて、そこでササと何やらそこそ話をしている。

何だろう。知り合いか？

気になつて思わずふらふらとササの元へと寄る。

「知り合い？ 知り合いなら一緒に飲もうぜ」

ポンポンとササの肩を叩くと、振り返ったササと片目の男がぎよつとした顔をする。

なんだよ。何も間違つた事は言っていないだろ。

「私、片目とはお酒飲みたくない」

「わたしだつてお断りです」

やっぱり知り合いなんだろうな。仲違いでもしてるんだろうか。

「細かい事にすんなよ。折角会えたんだし、別に酒くらいいいだろ」

二人は互いの顔を見合わせて、はーつと同時に溜息をつく。

折角俺が気をつかつてやったのに、その態度はないだろ。

ちらつとササが片目と呼ばれた男へ視線を向けると、片目は頭を抱えるような仕草をする。

「あなたがいいなら、いいですよ。大体飲めるんですか？」

「超失礼っ。お酒の名産地で育つたんだから飲めないわけないじゃない。ねえ、片目。飲酒喫煙は良くないんじゃないの？」

「細かい事は気になさなくて結構ですよ」

「細くないでしょ」

クスクスと笑うササに片目が向ける視線がやけに優しげで、ちょっとイラっとする。

それに笑うササの顔は、王都で会ったササに重なって腹が立つ。俺の前ではそんな顔をしなかつたくせに。

大体こいつとどういう関係なんだよ。

カウンターから片目の座る席に移って、最初の話題はそれだった。俺がどうしても聞きたかつたからなんだけど。

問いかけると二人で顔を見合わせる。二人だけの世界みたいなのが、また腹立たしい。視線だけで会話しやがって。

「知り合い、かな」

恐らく考え抜いたであろうササの誤魔化しに、カラは「ふーん」とだけ答える。

俺は全然納得してないぞ。その答え。

なのにカラは気にする素振りも見せず、そのまま他の話を始めてしまう。

おい。俺はもつとちゃんと問いただしたいんだって。この怪しげな男とササの関係を。

と、思っていたらカラに思いつきり裏拳を喰らった。腹に。

「察しなさいよ。馬鹿」

何で三人とも呆れ顔なんだよ。しかも馬鹿扱いかよ。

「こちらの方々は？」

「幼馴染よ。カラはこの村でワイン用の葡萄を作っていて、こっちのルアは王都で近衛兵やつてるの」

ピクリと片目の眉が動いた。

ふふん。俺の凄さがわかつたか。

「祭宮様の近衛兵です」

付け加えると、片目の視線が宙を見る。

何かを考えるかのようにして、それからワイングラスに口をつける。

「そうですか。近衛兵を。祭宮様付きということだと、色々大変でしょう」

「まあ。全国色々回ったりするので」

どう取ったのかは知らないが、うんうんと片目が頷く。

よしつ。一本取った。

「で、あなたはどんなお仕事をされているんですか」

「察しなさいってば」

問いに片目は答えず、カラの肘打ちがみぞおちに決まる。

やべえ。飲んだ酒があがってきそうだ。

さつきから察しろ察しろって、意味わかんねえよ。

「こちらのワインはあなたの……」

「はい。うちの葡萄から作っています」

「美味しいですね。何杯でも飲めそうなくらいフルーティーで飲み口が柔らかく。女性が好みそうな味ですね」

「ありがとうございます」

褒められたのに気を良くしたのか、カラがニコニコと笑っている。お世辞に弱すぎだろ。

確かにこの村のワインは、近隣の中でも人気も高いけど。

この怪しい風貌のおっさんに褒められて嬉しいか？

そんな俺の不機嫌さは女共には伝わらないらしく、俺の存在ガン無視で目の前で会話が繰り広げられている。

久しぶりにあった幼馴染より、おっさんのほうがいいのか。お前は。

この山のような肉もつけ合わせの野菜も、全部俺が胃袋に納めてやる。

ただひたすらに口に酒と食べ物を交互に詰め込んでいるけれど、誰も何も突っ込んでこない。

俺、ちよつと寂しいかも。

一通り和やかな会話が終わり、ふいに会話が途切れた途端に片目が立ち上がる。

「では、わたしはこの辺りで失礼します」

まるで兵士のような腰からパキッと折れる礼をして片目が席を立つと、ササがその後を追って何かを話しかけている。

「やっぱり、ただならぬ関係か。」

「何邪推してんのよ。色ボケ」

つめたーい視線の主に目を向けると、ふんつと鼻で笑われる。

「感じ悪いな。全く。」

「あれ見てわかんないなんて、あんた超馬鹿ね」

「色ボケとか馬鹿とか、言いすぎだろ」

「じゃあ目が腐ってんのね」

言い返そうとしたけれど、カラは聞く耳持たずの体勢に入っている。畜生。

「確かにやたら身のこなしはしつかりしてるし、ただのオッサンっぽくないけど、ササの何なんだよ」

「……本人に聞いてみたら。答えてくれるかどうかはわからないけど」

溜息をついて、カラは二人の様子を目で追っている。

「ちなみにあんたが考えているような仲じゃないわよ。ササの相手は別にいるわ」

「え？ 誰だか知ってんの？」

「女の勘よ」

一番あてにならない奴じゃねえかよ。

なんだよ、あのオッサンじゃなかったら誰だって言っただよ。

戻ってきたササに、開口一番聞いてみた。

「あいつ、ササの恋人か？」

カラが飲んでいたワインを豪快に嘔き出して、涙目になりながらむせている。

「そんなに面白い事言っただつもりはないぞ。」

「カラ大丈夫？」

ササの問いかけに、カラはゲホゲホという咳で答えている。どう

やら気管に入ったようだ。ご愁傷様。

「で、俺の質問に答えるよ」

「片目はそんなんじゃないよ。数年来の友人ってとこかな」

「あのオツサンがか？」

「おっさんって。まあ確かに中年かもしれないけど、友人には違いないわ」

苦笑しつつもササが答える。そう言うならそうなのかもしれないけど、なんか腑に落ちないぞ。

「じゃあ他にいる恋人って誰」

一瞬目を見開いたかと思ったら、まだむせているカラの背中をバシバシとササが叩きだす。

「何で余計な事言うのよー。もうっ。昔っからカラはそうやって言わなくていいこと言うんだから」

「いたっ。痛いって」

カラがササの手を払いのけて、その攻撃を交わす。

「聞かれちゃ不味いような相手なわけ？」

問われたササが視線を泳がせる。聞かれたくない相手ってことか。

「今のところ考え中なのっ。もうこれ以上聞かないで」

そう言われると、余計気になるんだけどな。

「宝石の人じゃないの？」

どこまで知っているのか、カラがササに問いかける。ササはじとーっとした目でカラを見る。

「宝石の人って何」

「ササがいつも身に着けている宝石よ。ササ、見せてあげたら？」

「どうして言わなくていいことばかり」

ぶつぶつ文句を言いながら、ササが鎖に繋がった青い石を胸元から引き出して見せる。

かなり大きな、そして恐ろしく値の張るものだろうという事は俺でもわかる。石の周囲の白金の細工も見事だし。

こんなもの、ポンと買えるようなもんじゃないぞ。俺の給料何年

分だ？

「これでいいでしょ」

そう言うとササはあっという間に石をしまっけてしまっ。

もうちよっつと見てみたかったんだけど、残念だな。

「そんなすごいプレゼントするくらいなんだから、超金持ちなんだらうな」

「……超金持ちかどうかは何とも言えないけど」

どうもすっきりしない言い方だな。どっちにしる金はありそうな相手だという事はわかった。

「あ。あのイケメンか。王都で会った」

ポンつと手を叩いて聞くと、ササの顔が曇る。

「その人はもういないの」

ぼそつと呟いたかと思うと俯いてしまっ。

おいおい。俺不味い事聞いちゃった？ やっべ。

超暗い顔になるササの肩に手を置いたカラが、思いつきり睨みつけてくる。

なんだよー。お前が変な話題振るからいけなさんだろ。

横目で二人の様子を伺いながら、酒に手を伸ばす。

気まずい事聞いちゃって悪かったかな。そんなに落ち込むような事だと思ってなかつたし。

軽率つちゃ軽率かもしれないけど、一応俺昔の彼氏だし、色々気になるんだよササのことは。

「色々大変だと思っけど、まあ頑張れ」

的外れだつたらしい俺の言葉に、ササは苦笑いを、カラは溜息とつ。

「それにしても不思議だなー。全然あの水竜の……」

ドゴつという大きな音と共に、俺の頬にカラの右ストレートが炸裂する。女の力だからさほど痛くねえけど、いきなり殴られる意味がわかんねえ。

カラに喰って掛かろうとした瞬間、ぐいっつと誰かに背後から肩を

押さえ込まれた。

「あ？」

怒りのままに振り向くと、シユウがニコニコ笑って立っている。「知らないだろうから、教えておいてやる。お前が言おうとしたことはこの村では禁句だ。次に言ったら今度は俺がぶん殴るから覚悟しとけ」

かなりドスの聞いた声に、怒りを飲み込んで、うな垂れるしかない。

なんだよ、一体何がこの村で起こっているって言うんだよ。かったりーな。言いたいことも言えないのかよ。

「この村から巫女が誕生した。が、巫女はもうこの村にはいないんだ。よく覚えておけ」

は？ 全然言っている意味がわかんないんだけど。

首を傾げると、シユウが持っていたお盆でゴンと頭を叩いてくる。「いってえ」

両手を頭の上に乗せてシユウを仰ぎ見ると、今度は思いつきり耳を引っ張られる。

「余計な事を言うな。ササを守りたいんだっただけだ。耳元で囁かれたけど、囁きって言うよりは脅迫に近い雰囲気だった。」

ササを守りたい？ なんだそりゃ。

「詳しくは家で母ちゃんにでも聞け。だから、今日のところはとっとと帰れ」

しっしっしと追い払われるように店を出たけれど、ササとカラはそのまま残ったようだった。

みんな俺の事邪魔者扱いしやがって。確かにこの村を出て10年近く経ったけど、そんなに邪険にしくたつていいじゃねえか。

ふと家までの帰り道、空を見上げる。

全然昔と変わらない空なのに、何もかもが変わっちまった。

大人になるっていうのは、何でも厄介なんだろうな。

家に帰ると嫁と母ちゃんが談笑していた。
そして教えてもらった。シユウの言っていた言葉の意味。

ササが巫女になった後、どこから漏れたのか村には沢山の観光客が「巫女生誕地」と見たくてやってきた。

最初のうちは村は便乗商売を始めて、隣の家の前にも「巫女生家」なんて立て札がしてあったらしい。

いつまで経っても戻らないササ。そして「奇跡の巫女」の伝説の流布。

どうやらササは大変な巫女になったらしいと、村の人たちは思ったらしい。誇らしくも思ったそうだ。

しかしそれと前後して、村には奇跡を求める人たちがぼつりぼつりと訪れだし、その数は爆発的に増えた。

ササはいないのに、巫女を求めてやってきて奇跡をと言ひ募る人々に、段々嫌気がさしてきた。

そして本当にササが戻った時に、ササがどのような目に合うのか、身をもつて体験する事になった。

それから「巫女生誕地」「巫女生家」の立て札も外し、巫女はもういないということにした。実際にササはその当時まだ戻っていなかったし。

そして大分村が落ち着いてきた頃、ササがふらりと戻ってきたようだ。

だか誰も、ササに巫女のことかどうとか口にしたりしない。

もう村に巫女はいない。実際ササはもう巫女じゃない。

奇跡を求めてやってくる人たちは後を絶えないけれど、それはこの村から出た巫女とは別人だし、巫女であった人は村にはいないと口を揃えて答える事になっているそうだ。

ササと守る為、ね。

むかし、俺が好きだった女つてのは、大した女だったようだ。
青い衣、薄いベールに隠された素顔。光差し込む祭壇の前で儀式
をする巫女。

緋色の衣に身を包み、空を竜と飛ぶ紅竜の巫女。

そのどちらも俺は実際にこの目で見たことがある。

神々しく、そして優美さの漂っていた巫女。

それとササが同一人物だなんて、ゼーんぜん実感ねえな。

どうせこれからもパンを焼き続けるんだろ？

何でこのメンツで酒飲む事になったんだっけ。

ああ、そうだ。どうしてもカラが自宅には俺を招きたくないって言ったからだっけ。忘れてた。

相変わらずのシユウの酒場。薄暗い店内にはお客満載って程でもないけど、程よく人がいる。この村に一軒しかない酒場だからね。そりゃ繁盛するよな。

テーブルには俺、カラ、カラの旦那、それからササ。

2対2のカップルに見えねえ？ って言ったらカラにぶん殴られた。

それを横目でカラの旦那は微笑ましそうに見ている。てめえの女くらい、見てないで止めるよな。ったく。

何でこんな暴力女がいいんだか。そういや旦那が惚れて惚れて惚れまくって、カラに猛烈アピールして口説き落としたんだっけ。

「なあ、このカラのどこが良かったんだ？」

正直にそう思うから聞いたのに、ギロつと女共から睨まれる。何だよ。カラはともかくササまで睨みつけやがって。

カラの旦那は人好きのする笑顔を浮かべてニコニコしているだけで、答えようとはしない。

あ、そういや俺、こいつが話してるところ、一度も見たことねえや。

カラの実家に言った時も黙って笑ってるだけだったし、この場に來てからも喋ってねえな。変な奴。

「そんなことはどうだっていいじゃない。恋愛したりするのに理屈なんてないでしょ。あんただってお嫁さんのどこに惚れたのよ」

酒を煽りながらカラにそんなことを聞かれるけど、答えなんてあるか？

「どこって言われてもなあ」

付き合いだした頃は若くて可愛かったけど、今じゃなんかどーんと遅しくなつて可愛らしさの片鱗もないな。

家でごろごろしてようものなら、掃除の邪魔だとかつて言われて、俺居場所ねえし。」

普段近衛でこき使われているんだから、たまの休みくらい家でのんびりしたつてバチあたらねえよ。昼寝したつていいじゃねえか。たまに友達と遊びに行つたつていいじゃねえか。

それなのに、さも俺が何もしてないような事言いやがる。してるだろ。仕事。給料だつて渡してる。

それ以上に何やれつて言うんだよ。子供の面倒？ 何したらいいかわかんねえよ。そんなの。」

「あんだ、口から本音がダダ漏れしすぎ」
呆れ顔でカラに突つ込まれる。

「何も言つてねえだろ」

「言つてたわよ。奥さんに逃げられるのも時間の問題じゃないの？」
「うっせえよ。んなわけねえだろ。大体な、近衛つていや、平の兵士の中では花形なんだぜ。近衛だけが着られる制服なんてのもあつてだな。その辺の兵隊とは訳が違うんだよ。優秀だから王族の護衛の仕事が回つてきてだな。つておい、お前ら少しは聞けよ」

目の前で女共は俺の話なんて無視して、つまみに手を伸ばしている。

ちらつとカラの旦那のほうを見たけれど、そいつまで俺の存在を無視している。

幼馴染つて何だよ。冷てえな、故郷の水は。

手酌でワインを注ごうとデカンタに手を伸ばすと、カラの旦那の手が一瞬早くデカンタを掴み、俺の空いたグラスにワインを注ぐ。

「あ。どうも」

ここで会話が弾むかと思つたけど、旦那は相変わらずニコニコ笑うだけで何も話をしようともせず、自分のグラスに酒を注ぐ。

もしかして、カラに余計な事言うとか口止めされてんのかな。

でも、笑ってるだけで挨拶さえしないなんて、超感じ悪くね？
何かこいつに話しかけてもイライラするだけだから、話しかける
のやめよ。

「なあ、カラ」

ササと談笑していたカラに声を掛けると、一気に眉間に皺を寄せ
て不機嫌顔になる。こいつも感じ悪いな。

「旦那とどこで知り合ったの？」

カラはダンナと顔を見合わせ、二人で微笑みあう。
うわー。二人の世界ですか。んなこと口に出したら、またぶん殴
られるから言わないけど。

とりあえず押し黙ってワイングラスを口元に当てて返答を待つ。

別にカラがどこの誰と結婚しようとか俺が口を挟む権利なんてない
けど、気になるじゃん。幼馴染の旦那がどんな奴なのか。

「俺がこの村に奇跡を求めてやってきて、偶然カラと出会って一目
惚れして今に至ります」

おおつ。初めて旦那の声を聞いたぞ。っと、驚くところはそこじ
やないな。

「へー。奇跡を求めてって何しに来たの？」

「文字通り奇跡を求めてですよ。残念ながら奇跡の恩恵には預かれ
なかったけど、幸運にも最愛の女性に巡り会えて感謝してますよ。
水竜には」

「もうっ。何でそんなこと言うのよ。恥ずかしいじゃない」

「恥ずかしい？ たまには本音も言っておかないと。カラの気持ち
が過去に引きずり戻されたら困るからね」

「ちよつと。余計な事言わないでよ」

「はいはい」

目の前で繰り広げられる痴話喧嘩を呆然と見つめる。

なんだ、この甘々空間は。

あのカラが頬を染めて旦那に上目遣いで……。幻覚か。いや、現
実だ。

女だてらにガキ大将の異名を持っていたカラがねえ。変わるもんだ。

妬けるとかってわけじゃないけど、何か、もやっとするな。俺が村を離れていた10年の間に、村だけじゃなくて人も様変わりしたんだな。

カラが女に見える。

生まれた時から女なんだけど、どんなに髪を伸ばそうがスカート履こうが男らしかったカラが変わったんだな。

溜息を吐き出すと、ササと視線が合う。

「どうしたの？」

「ラブラブ光線に毒された」

「何それ」

まるで貴族のお嬢様のように、ササが口元に手を当ててクスクスと笑う。

昔はこんな仕草しなかったのにな。やっぱり巫女だったから変わったのか。綺麗になったと思うけど、それだけじゃなくてもものすごく上品になったような気がする。それこそ俺が王宮で見かけるようなご令嬢方のように。

着ているのはごわごわの麻の服のはずなのに、まるで絹を纏っているかのように見える。雰囲気だけだけど。

例えば椅子に座る時、ワイングラスを持つ時、笑う時。そういった細かいもの全てがご令嬢風だ。

それとも、もしかして例の宝石の人の影響か？

何せあのカラが旦那でこんなに変わったくらいだ。ササも恋人が出来て変わったとか。

あれ、でも王都で会った時にはもうこんな感じだったよな。ということは、やっぱり巫女効果か。

「ルアは奥さんとラブラブじゃないの？」

「え？ ああ。そんなの無いな。腹の中入れたら子供4人だぞ。今更そっという甘い空気は無いな」

「えー。そうなの？ でもそんなに子供いるくらいなんだから、仲いいんでしょ」

「まあ、悪くないけど」

ササに聞かれると、どうもカツコつけて迎えに来るなんて言っていた手前、嫁のことを聞かれると引け目を感じるせいか後ろめたい気持ちになる。あんまり嫁の事は話したくないのに、ササはそんなことお構いなしだ。

その、嫁のことを聞いても全然平気って感じがまた、俺に興味なんて無いって宣言してるみたいでイラっとする。

「そうなんだ。子供、次は男の子かな女の子かな。楽しみだね」

無邪気に笑うササが小憎たらしくなってくる。

別にさ、今更どうこうなるうとか考えてないけど、そこまであっさりされるのも寂しいっていうか、腹立たしいっていうか。

俺ばかり意識してんのかよ。

「そんなことより、ササの恋人ってどんな奴？」

またカラにどつかれるかと思って構えたら、意外にもカラは何もしてこないでニヤニヤ笑っている。

「今更あんたの出番は無いわよ」

「そんなんじゃないやねえよっ」

いけね。思わず熱くなっちまった。これじゃ余計にカラのニヤニヤが酷くなるばかりだ。

俺には嫁も子もいる。それにいつまでもガキの頃の恋愛引きずってねえって。

溜息をつき、カラを睨む。

「10年も前のガキの話なんか、いい加減忘れろよ」

照れ隠しがてら言っと、カラとササが顔を見合わせて溜息をつく。何だ、その反応は。

「んなことどうでもいいからさ、この中で売れ残ってんのササだけだぜ。どうすんの？」

「どつするのって？」

「だからさ、その宝石の人とはどうなんだって聞いてんだよ」
ササの顔が一気に赤く色付いていく。

「あー、もう何も言われなくともわかった気がするよ。」

「もういいや。そんな顔するような相手なわけだな」

「そんな変な顔してないでしょ。失礼ねっ」

ブンブン怒った顔してるけど、頬は赤いまま。

「あーあ。俺、敗北感でいっぱいだ。ここにいないとも、ちょっと話題に上がったただけでもその反応かよ。」

あの超イケメンに会った時にも思ったけど、女の子らしい顔してくれちゃってさ。俺と付き合ってた時にはそんな顔しないで怒ってばかりだったつてのに。

恋が人を変えるってか。

「ああ、そうだ。明日、朝早いんだった。ゴメン、先帰るね」

慌てた様子で立ち上がると、ササはカラと旦那に挨拶をしてそそくさと店を後にする。

「何だよ、付き合い悪いな。この間は延々閉店までカラと飲み明かしてたらしいのに。」

俺がいると飲む気にもならないのかよ。それとも、よっぽど宝石の人の事は聞かれたくねえのかよ。

ぐいっと飲み干してグラスを空にすると、旦那がまたグラスにワインを注いでくれる。

「どうも」

「いえ」

今度は返答があつた。最初からそうやって返事しろよ。

わけのわからないイライラで腹の中が熱いくらいだ。こいつも、ササもイライラさせやがって。

「何であんなに急いで帰つたんだ。よっぽど大事な用事でもあるのかよ」

カラに聞いてもわからないかもしれないけど、聞かずにはいられない。まるで俺のことを避けるみたいにして帰つたササに腹が

立つ。

クスクスとカラは笑い、旦那のほうを見る。

「多分、宝石の人じゃない？」

「あ？」

「だから、宝石の人と会っくんじゃないのかな。宝石の人って言うて急に思い出したみたいだし。ね？」

同意は旦那に向けられている。俺じゃない。

「だろうね。あんなにそわそわしてるって事は」

旦那も訳知り顔で頷いている。ちえっ。俺だけ蚊帳の外かよ。

「ところでさ、最近王子様元気？」

「急になんだよ」

「いやー気になって。あんた相変わらず王子様に仕えてんの？」

女つてのはコロコロ話が変わるな。

「あー。殿下付きの近衛だけど、何で」

「ううん。長期休暇って事は、王子様に何かあったのかなって思っただけ」

何でそんなことが気になるんだか。

あ。もしかして、俺がいつまでいるか気になるとか。ちょっと気分が浮上してきたぞ。

「殿下はお元気だ。国の状態も落ち着いたから、俺ら地方から出てきてる下っ端に地元に戻る機会をやるうっていうご配慮だよ」

すげえだろ。俺の上司は。気遣いも完璧なんだよ。

至近距離であんまり会った事ないから、正直顔の細かい造形とかわかんねえけど。

俺、いつも最後列付近だし。

「ふーん、そっか。だからあんたが村に帰ってきたって訳ね」

「ああ。なんかしばらく領地の方に行くから、領地の城のほうにも兵士がいるし、配下の近衛全部連れて行かなくてもいいらしい。領地もそういえばこの辺なんだよな」

「ふーん。そう」

こくと頷き、カラは旦那のほうを見つめる。

「間違いないわね」

「そうだね」

二人は俺にはさっぱりわからない会話をしている。この阿吽の呼吸にどうやって突っ込みを入れるっていうんだよ。

どーせ俺はもう余所者だよ。ぽっと出の奴に負けるくらい、存在感ねえよ。ちくしょう。

クスクスッとカラが笑う。

さっきのササがしたのよりも、全然上品じゃないけどな。

「あんた、そんなにササのことが気になるなら、夜明け前に村をぶらぶらしてみな。きっと会えるよ。ササの彼氏にね」

「おい」

咎めるような旦那にカラが手と首を振って、何か言おうとした出先を挫く。

「いいのよ、いずれわかることでしょうしね。それにどうセルアはそんなに早起きできやしないもの」

「馬鹿にするなっ」

ふんつとカラが鼻で笑う。

それがまたイラつとするんだよ。あたしは何でもあんたの事知ってるんだからねって言わんばかりでさ。

けど、ついつい徹夜してしまった。酒がまだ残っているぼんやりとした頭のまま、まだ闇の色の濃い時間に実家の外へとそーっと足をしのばせながら出る。

寝ている家族を起こすのも悪いしな。

ぶらぶらと村の中をあてもなく歩いてみるものの、目的の二人には出会えない。

本当にササが男と会ってるのかよ。こんな殆ど夜中みたいな夜明け前の時間に。勘違いじゃねーの。

こんな形でカラに騙されるんなら、素直に寢床に入ればよかったよ。

欠伸をしながら静まり返った村の中を歩く。

どこにもいやしない。やっぱりカラに騙されたんだな。

寝不足と酒の回った状態で、腹立たしさだけがこみ上げてくる。

とりあえずそんなに広くない村をぶらぶらと一周したけれど、ササなんてどこにもいやしない。もしかしたらまだササ寝てるんじゃないか。それなら一度家に戻るか。

とぼとぼと家路に着き、実家の店側の入り口から入ろうと扉に手を伸ばす。

「ねえ、眠くないの？」

ドアノブを回しきろうとした時に、ササの声が耳に飛び込んでくる。

どこだ。

きよるきよると周囲を見渡してみるけれど、どこにもササの姿なんて見えない。

「眠くないわけないだろ。じゃあ昼間に会いに来てもいいのか」

「……それは、嫌」

クスッと男の笑い声が耳をくすぐる。

「じゃあ我慢しろって」

どこだ。この声はどこから聞こえて来るんだ。

声のするほうに顔を向けてみるけれど、どこにも姿が見えない。

ササんちのほうから聞こえるんだけど、家の中から聞こえる風でもないし。

足音を消して、そーっと一歩ササの家のほうに歩き、更に耳を澄ます。

「私は眠くないけれど、ウイズは眠いでしょ」

ウイズ？ その男の名はウイズっていうのか。聞き覚えが無いな。この村の人間じゃなさそうだな。

隣の村とか、それとも宿場町に住んでるとかか。

「まーた俺の名前口に出したな」

「あつ。でも、何で名前を呼んだらいけないの？」

「俺の素性がばれたら困るから」

素性がばれたら困るって、もしかやお尋ね者か？ そんな相手はやめとけよ、ササ。

じりじりと声のするほうへと体を向ける。どうやら俺の実家とササの家の間の僅かな路地に二人はいるらしい。

ばれないように体を乗り出して、二人の姿を確認する。

ササはこちらに背を向けているし、男の顔は暗闇でよくわからない。わかるのはササよりも頭一つ半くらいでかい男って事くらいか。うーん。今武器持ってないんだよな。素手でひっ捕らえる自信ないな。鍛えてるって言っても、相手がヤバイ武器なんか持ってたら反対にこっちがやられる。それにササに抵抗されそうだしな。

実家の壁に寄りかかって考える。どうしたもんかな。

こんな薄暗い中で密会しなきゃいけないような、名前も口に出す事を禁じられるような相手だ。絶対、まずい。

恋は盲目だとかって言うけど、これは俺が幼馴染としてササの目を覚ましてやらなきゃいけないよな。

「ちよつ。ヤダ」

んー！？

「やっ。ウイ……」

ぐつと地面を蹴った。

「おいっ、何してる！」

考えるより先に、路地に飛び込んだ。

男の腕の中でササがピクつと肩を動かして、こちらを振り返ろうと首を回すけれど、男の手がそれを阻む。

「何って。別に咎められるような事はしてない。邪魔するな」

冷ややかな声が向けられたかと思うと、まるで見せ付けるかのように男はササの頬に口付けする。

「やっ。やめてよ」

くすくすたがるような仕草で甘い声を出すササは、俺が見ても本

心から嫌がっているようには見えない。

カーッと頭に血が上ったのがわかる。

足音を立て、二人の傍へと歩みよってササの肩に手を掛けようとするけれど、男がすつと体を入れ替えて、ササを隠すように抱きしめる。

ちくしょう。離せよ。

「出歯亀くん。恋人との久しぶりの逢瀬を邪魔するのはやめてくれるかな」

にやりと笑ったのが暗闇でもわかる。

何だとこの野郎。

「うるせえ。俺は幼馴染として、あんたみたいな不審者をササに近づけないという使命があるっ」

くすつと男が笑う。超馬鹿にしきつたその態度、一発殴らなきゃ気がすまねえ。

「え？ ルア？」

素っ頓狂な声に、握り締めた拳の力が抜ける。

腕の中からひょっこりと顔を出して振り返ったササの顔が、みるみるうちに固まっていく。

「何してんのよ。何でこんな時間に起きてるの」

「問題はそこじゃねえだろ」

それよりも問題はお前を抱いているその男の正体だ。

ササが男を見上げると、男は肩をすくめて苦笑している。

「どうする？」

「どうするって言われてもな。どうしようもないだろ」

ササに聞かれた男は、ササの髪を撫でながら俺を見る。

じーつと俺を見つめるその顔に、見覚えがある気がする。どこだっけ。俺、人の名前と顔覚えるの苦手なんだよな。でもこんな片田舎の村に知り合いがいるとは思えない。

「あんた誰だ」

意を決して聞いたのに、男はぶつと噴きだす。どうやらとことん

小馬鹿にされているらしい。

「ちよつとルア」

「お前は黙ってる」

ササが何かを言いかけたのを男が制する。ぷーっと頬を膨らませてササは溜息をつく。けれど、男は決してササを離そうとはしないし、ササも男の腕の中から逃げようともしない。

「口尖らすなつて」

クスクス笑い、男はササの唇に人差し指を押し当てる。

おい。いちやいちゃすんなつ。

「ああ、ごめんごめん。君の存在を無視していたわけじゃないよ」
俺の心の声が聞こえたようで、男の視線がササから俺に移る。その視線にぞくつと寒気がした。

「他言するな。もし他言したらお前の首はないと思え。いいな」

決して怒鳴られているわけでもないのに、腹に響くその声に聞き覚えがある。

全身に鳥肌が立った。俺、やべえ。

背中にだらだらと冷や汗が流れてるし、手のひらは汗だくだ。

「な、な。なんで。なんで。なんで、ですか」

「それはどちらの意味か」

「ど、ど、どち。どちら、どちらって」

焦る俺を他所に、男は、いや、俺の仕える人の目は笑っているようにも見える。

「他言無用といった事と、彼女と俺がここでこうしていること。そのどちらに対して何でと言ったんだ」

そんな細かい事言われてもわかんないって。

何で自分でもそんなこと言ったのかわかんねえもん。

がくりと頭を垂れるしかない俺の頭上に、笑い声が降ってくる。

ああ、そうだ。俺を笑え。俺はとんでもない道化だ。

「まあいい。余計な事を喋るな。俺の邪魔するな。以上だ。下がれ」

「はっ。はいっ」

瞬間的にぴーんと背筋を伸ばして、最敬礼する。

この声に逆らえるはずが無い。

回れ右して、行進のような姿勢のまま路地を出る。振り返る事なんて出来なかった。

振り返ったらその場で俺の首が飛びそうな気がして。

仮眠を取って、軽く食事を済ませた後、嫁の小言と子供たちの遊んでコールを無視して家を飛び出す。

目指した先はカラの家。

ドンドンと扉を叩くと、カラが不機嫌そうな顔で力一杯扉を開ける。

「うるさいのよ。呼び鈴一回鳴らせば十分でしょっ」

「お前、知ってたのかよっ」

眉をひそめてカラが俺を睨む。

「何のことよ」

「だーかーらっ。ササのことだって」

「ああ。あんた見たのね」

クスクスとカラが笑い声をあげる。笑って、それから指を指す。

「もっと見たかったら、あの丘の上に行けばいいと思っわよ」

「出来るかボケっ」

大声を上げて笑うカラにイライラする。

「知ってたなら教えるよ。俺、危うく近衛首になるところだったんだぞ」

「あーら。それはごめんなさいね。でもあんた、あたしが何言ってもきつと信じなかったでしょ。その目で見ない限り」

「そりゃそうだろ。ササの恋人が祭宮殿下だって言われて、普通、信じられるか？」

「あんた、それを口に出すのは迂闊すぎよ」

ぐいっと腕を引っ張られて、カラの家の玄関に入ると、カラは勢いのわりには小さな音を立てて扉を閉める。

「ササの事、パン屋の娘って事以外は口に出さない方がいいわ。巫女の事も、王子様の事もね。どこで誰が聞いているかわからないもの」

焦って思わず視線を巡らせる。

どこで聞き耳立てているかわかんねえ。もし、今カラにこの話をしたことがばれたら。

あの目、あの殿下の目は本気だった。

先王陛下を殿下が毒殺しようとしたとか、薬を盛って廃人にしたとか、色々黒い噂のある人だ。やる気になったら、俺なんてあつという間に消される。

今の国王陛下だって、殿下の傀儡って噂だつてあるんだぞ。

「巫女は王子様と幸せになりました。ほら、まるで始まりの巫女の詩みたいじゃない？」

「……あの人は王子様なんてキラキラした人じゃない。やばい。俺、超やばい。絶対にやばい」

ガクガク震える俺を、カラは呆れた顔で見つめるばかりだ。

見るんじゃなかった。あんな現場。俺には乳飲み子や、これから生まれてくる子もいる。可愛い子供たちを路頭に迷わせるわけにはいかないんだ。

この秘密、絶対墓場まで黙って持っていこう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5980t/>

MY SWEET DARLIN'(補完編) 幼馴染は目撃者

2011年6月4日20時10分発行